

流音1について

八 亀 五三男

I はじめに

初めての外国語として英語を学習し始めた頃、アルファベットで綴られた *table, milk, April, little, bottle* などの発音がわからなくて、「テーブル、ミルク、エイプリル、リトル、ボトル」のようなカタカナ表記でそれらの発音を教えられた記憶が残っている。しかし、英語母語話者の発音を実際に聞くと、聴覚的には「ル」という発音ではなくむしろ「ウ」に近いと感ずることがよくあった。つまり「テイブゥ、ミャク、エイブリゥ、リトゥ、ボトゥ」と発音した方が英語らしく聞こえるのである。

普通「フォーク・ソング」「シャーロック・ホームズ」とカタカナ書きする英語も、元の綴りはそれぞれ *folk song, Sherlock Holmes* で、発音は [fouk], [houmz] と二重母音になっている。つまり、「フォー」「ホー」と長音表記するのではなく、「フォウク・ソング」「シャーロック・ホームズ」と母音の「ウ」を使用した方が原音により忠実なカタカナ表記と言える¹⁾。

このように1が母音の [u] のように聞こえる、実際そのように発音されるという音声現象は、ポルトガル語²⁾ にも見られる。例えば、ポルトガル語が公用語である南米ブラジルの国名 *Brasil* は「ブラシル」ではなく、まず *s* が母音間で有声化して [z] となり³⁾、1が語末で「ウ」となる。それゆえ、カタカナ表記としては「ブラジュ」が最も近いと言える。また、1が語末に来ていない *alto* 「高い」の場合も、「アルト」ではなく聴覚的には「アウト」に非常に近い発音になる⁴⁾。

日本語の音韻体系には存在しない1の音声学的特徴が、ヨーロッパの言語において共時的、通時的にどのような音声音韻現象を引き起こすか、引き起こしたか、どのような言語現象となって現われているかを具体的に観察、分析することが本稿の目的である。多くの子音の一つにすぎない流音1が諸言語の中でどのような行動を取るのか、取ったのかを解明し、その言語的特徴を明らかにしたいと思う。

II 1の音声学的特徴

まず初めに、1の音声学的な特徴について確認をする必要がある。

言語音を大きく母音と子音に分類すると、子音の中に従来「流音」*liquid* と呼ばれている音が二つある。1と *r* であって、これらは [+consonantal, +vocalic] の弁別的特徴があるとされていて

いる。すなわち、本来は子音であるのだが母音と子音の特徴を両方兼ね備えており、音声環境によっては母音としても機能するというを意味する。Laurence J. Raphaelは半母音 *semivowel* に関して次のような記述をしている⁵⁾：

[Acoustic cues to the semivowel consonants] The semivowels are often subdivided into two classes: glides (/w, j/) and liquids (/r, l/). ...the sounds bear a strong relationship to vowels ...

半母音は「わたり音」(/w, j/) と「流音」(/r, l/) の2種類に分類され、それらは母音と密に関連していると指摘している。

また、音節主音的子音 *syllabic consonant* という音声学用語を用いて説明されることもある。すなわち、子音の中には母音的特徴を有するがゆえに、音声環境によっては音節を形成することができるものがある。schwa [ə] が語末の鼻音 (m, n)、流音 (l, r) に後続されると、[ə] が脱落し後続する子音が母音化し音節を形成する。例えば、英語の *sudden* であるが、本来の [sʌdən] という発音から上記のプロセスを経ると、[sʌdŋ] となり [-dŋ] で第二音節を構成することができる⁶⁾。

この現象はlについても観察され、H. Reetz & A. Jongmanは上記の分析をさらに確実なものにするために、もともと [ə] の入っていない *able* と同様の現象だと追加説明をしている⁷⁾：

... as in *able* – the [bl] is the second syllable of the word.

[bl] の音節主音的子音 [l] が母音の機能を果たし、一つの音節を構成している。このように英語 *little*, *bottle* などの語末のlは *syllabic consonant* と同時に、*dark l* とも言われ通常 [ɫ] と音声表記される⁸⁾。Iで述べたように、聴覚的には「リトゥ」「ボトゥ」が原音に近いと思われる。

音声学的には、[ɫ] は「有声歯茎側面接近音」*voiced alveolar lateral approximant*, [l] は軟口蓋化した（「暗い」）「有声歯茎側面接近音」と厳密に定義されるのだが、J. Clark & C. Yallopは英語のいわゆる ‘clear l’ と対立するこの ‘dark l’ の特徴を次のように記述している⁹⁾：

... a ‘clear l’, as opposed to the ‘dark l’ with the body of the tongue lower and further back, as for an [u] vowel.

すなわち、*dark l*は舌の位置が低く後方に下げられ母音 [u] に類似している。

それゆえ、これから具体例を分析していくように、lが共時的に、また通時的にuと交替、変化するというのは、音声学的に十分な根拠に基づいた音声現象と言える。本来lは子音ではあるが、条件によっては母音uとその音声学的特徴が似てくるのである。

III 共時的交替

「I はじめに」で、ポルトガル語の *Brasil*, *alto* などの発音は「ブラジュ」「アット」に近いと述べたが、*alto*の第一音節 (al-) は英語 *cow* の二重母音のように発音されると説明されることがよくある。ここではまず、どのような音声環境で「ウ」に類似した発音になるのかを観察したいと思う。

(1) *castelo* 「城」, *escola* 「学校」, *lábio* 「唇」, *oliva* 「オリーブ」, *parla* 「おしゃべり」, *relógio* 「時

計], sala「居間」, templo「寺院」, valor「価値」

(2) abril「四月」, bolsa「財布」, faculdade「能力」, igual「等しい」, metal「金属」, polca「ポルカ」, sal「塩」, universal「普遍的な」, voltar「戻る」

上記のポルトガル語語彙は、(1)が [ɫ], (2)が [ʎ] である点で発音が相違している。2種類の発音しかないので、(2)の条件がわかれば(1)は自動的にそれ以外ということになる。

(1)には語末に1が来る例は存在しない。(2)はabril, igual, metal, sal, universalで1が語末に来ているが, bolsa, faculdade, polca, voltarでは語末に位置していない。しかし、後者4つの語をbol-sa, fa-cul-da-de, pol-ca, vol-tarのように音節に区切ってみると、1が音節末に来ていることがわかる。語末も音節末であるので、(2)の条件は「音節末」、(1)はそれ以外ということになる¹⁰⁾。音節末に位置すると、1は母音としての特徴を有するようになる。

以上をまとめると、ポルトガル語では、1の発音は以下のように相補分布をなしている、すなわち、2つの異音allophoneを持っている：

(1) 音節の初め(母音が後続)：[ɫ] 例：calor「熱」, livre「自由な」, solar「太陽の」

(2) 音節末：[ʎ] 例：calmo「穏やかな」, mal「悪」, Ronaldo「ロナウド(男子名)」¹¹⁾

繰り返しになるが、(2)をカタカナ表記する場合は「ウ」とするのが原音に最も近く、聴覚的には「カウモ」「マウ」「ロナウド」とするのが適当だと考えられる。

さらに、この [ʎ] は [w] と音声表記される場合もあり、また特にリオデジャネイロあたりの広い地域では [u] と母音化していると言われている。例えば、A. P. Hutchinson & J. Lloydは、'brazilian variants' として Portugal (英語 Portugal), papel (英語 paper), funil (英語 funnel) を例示して "l final position = diphthongs au, eu, iu" と述べているように、明確に1を母音の [u] と認識していると考えられる¹²⁾。

IV 通時的变化

ゲルマン語派の西ゲルマン語に属するオランダ語にoud, koud(発音はそれぞれ [ɔut] [kɔut])という語があるが、他のゲルマン語との語形対応を示すと以下のようなになる(オ=オランダ語, ド=ドイツ語, 英=英語, デ=デンマーク語, ア=アイスランド語)：

オ oud：ド alt, 英 old (北ゲルマン語は、デ gammel, ア gamallのように別系統の語を使用)

オ koud：ド kalt, 英 cold, デ kold, ア kaldur

2番目の例に注目したいと思う。これら5つの言語の中でアイスランド語だけが語末が-urで終わっている。この言語は(ドイツ語と同じように)名詞, 形容詞, 代名詞などに格変化を有しており、主格, 属格, 与格, 対格の4つの形式に変化する。また、文法性は男性, 女性, 中性と3つある。形容詞kaldurは単数主格男性形で-urはその曲折語尾、語幹はkald-であって、これら5言語の祖先に当たるゲルマン祖語の再構形は*kald(-az)である。

オ koud

ド kalt
 英 cold
 デ kold
 ア kald (ur)

オランダ語以外の言語の音連続はCVCCとなっている（C=子音，V=母音）のに対して，オランダ語だけはCVVCとなっている，すなわち3番目の音がオランダ語：その他の言語=u:1(V:C)と対応している。ゲルマン祖語の形は*kald-であるので，オランダ語は音韻史的に1 → uという通時的変化を被ったことになる。1 [ɪ] → 1 [u] という音声変化の現象が起り，それが綴りに影響を及ぼしたのであるという予測が立つ。

これと同様の例として下記のような語がある（ouの発音は全て [ɔu]）：

オ boud：ド bald¹³⁾，英 bold（デ dristig，ア djarfur）¹⁴⁾
 オ goud：ド Gold，英 gold，デ guld，ア gull
 オ houden：ド halten，英 hold，デ holde，ア halda
 オ mout：ド Malz，英 malt，デ malt，ア malt
 オ stout：ド stolt，デ stolt，ア stoltur（英 proud）¹⁵⁾
 オ woud：ド Wald，英 wolt，ア völlur（デ skov）¹⁶⁾
 オ zout：ド Salz，英 salt，デ salt，ア salt

このオランダ語の他言語との相違に関してM. J. van der Wal and Aad Quakは以下のように説明している¹⁷⁾：

The Old Dutch cluster /ol/ +dental (from earlier /ol/, /ul/ and /al/ +dental) diphthongized to /ou/ +dental. Hence we find Middle Dutch *gout, schout, wout* but Middle High German (and Modern German) *Gold, Schuld, Wald* ‘gold, guilt, forest’.

このように，/ol (←ol, ul, al) / +歯音という音連続の環境で母音の後のlがdark l (velarized l) となり¹⁸⁾，さらに二重母音化し最終的にはその発音が綴りに影響を与え，正書法を変更させるに至ったと考えることができる¹⁹⁾。

オランダ語はゲルマン語派に属するが，イタリック語派の言語に関しても重要な通時的現象を観察することができる。この語派に属するラテン語の子孫に当たる言語としてはイタリア語，フランス語，スペイン語，ポルトガル語，ルーマニア語を挙げることができるが，その中のラテン語とフランス語の音，文字対応に規則性を見出すことができる。

以下の対応例を見て頂きたい。左にラテン語，それに対応するフランス語を右に例示する：

ラテン語	:	フランス語	
alter		autre	「別の」
calvus		chauve ²⁰⁾	「禿げた」
calx		chaux ²⁰⁾	「石灰」

流音1について

malva	mauve	「ゼニアオイ (植物)」
palma	paume	「手のひら」
saltus	saut	「跳躍」
salvare	sauver	「救済する」
salvus	sauve ²¹⁾	「安全な」

2つの言語を比較してみると、ラテン語：フランス語=1:uとなっていることがわかる。(俗ラテン語からフランス語へと変化していく過程において、1が音声学的に軟口蓋化を起し [ɪ] (あるいは [w]) 徐々に [u] に変化していったものと考えられる。É. Bourciezの説明に従うならば、「1+子音の結合において、1は母音化して先行母音と二重母音を形成した」ということになる²²⁾。malva:mauveの例で言えば、-lv- [1+子音] の1がuに変化して-uv-となり、このuが直前にあるaと結合して、二重母音auを形成する (→mauve)。

これまで1の母音の特徴・性質がポルトガル語、オランダ語、(ラテン語→) フランス語で共時的、通時的にどのような機能を果たしているか、果たしてきたかについて述べてきたが、その音声学的特徴が印欧語比較言語学において印欧祖語の音韻再構に役立っている。1の母音性について、印欧語比較言語学において興味深い再構が成されている。

O. J. L. Szemerényiは、再構された印欧祖語の音韻体系を以下のように非常に明確に提示している²³⁾：

1. 子音

- (1) 閉鎖音²⁴⁾
- (2) 鼻音
- (3) 流音
- (4) 半母音
- (5) 摩擦音

2. 母音、二重母音、ソナント

それぞれには例えば以下のような音韻が含まれている：

1. 子音 (1) p, b, ph, bh, t, d, th, dh, k, g, kh, ghなど (2) n, m (3) l, r (4) y, w (5) s
2. 母音 i, e, a, o, u, ə, ei, ai, oi, eu, au, ouなど。

ここでひとつ注意すべきことは、2の中にソナント *Sonanten* という一連の音韻が含まれていることである。長音、短音両方あるのだが、それらは子音の鼻音、流音の母音化した音で、子音 n, m, l, rの文字の下に。を付けて、ñ, m̃, l̃, r̃と表記する。これは、IIで述べた音節主音の子音 *syllabic consonant* のことで、音節を構成することができるのである。

印欧語比較言語学においては、鼻音 *nasal* (m, n) と流音 *liquid* (l, r) は常に同じように扱われている。それは、これら4つの子音は、他の子音とは異なり母音の性格を持ち得るからである。上述したように、その中に1が含まれている。フランスの印欧語比較言語学者 Antoine Meilletは、この母音的ソナントについて以下のように説明を加えている²⁵⁾：

[Sonantes voyelles] Placées entre deux consonnes ou à l'initiale devant une consonne ou en fin de mot après une consonne, les sonantes servent de voyelles.

「二つの子音間においてまた一つの子音の前の語頭あるいは一つの子音の後の語末において、ソナントは母音の機能を果たす」と記述し、ソナントの特異性を明瞭に説明している。

そして、これに続けてこれらの母音的ソナントが印欧語の各語派においてどのような音韻として実現しているかをまとめている (ī, lū, iī, uī, al, la, al, ul, li など)²⁶⁾。

再構音は理論的仮想物であり、実際は時間的に逆戻りをして現存資料から過去のものを作り上げていった。言語資料として実際に存在する ī, lū, iī, uī, al, la, al, ul, li などから、通時的にそれらになり得る（実在化し得る）祖語時代の無理のない理論的再構成音を構築していったのである。1は「母音の性質を有する」と音声学の特徴がわかっているからこそ、通時的に矛盾の生じない妥当な再構音を設定することができた。

V 共時的交替と通時的变化の関連

IIIでポルトガル語1の発音についての相補分布（共時的現象）、IVでラテン語からフランス語への通時的变化を観察したが、もう一度整理をして全体的な考察を加えたい。

これまでの分析により共時的にも通時的にも「文字1は母音[u]の[に近い]特徴を有している」と言えるということがわかった。それを図示すると以下ようになる：

文字	1		1		1	→	u
発音	[ɪ]		→ [u]に近い		→ [u]		
(1)	ラ altus		ポ alto				フ (h)aut ²⁷⁾
(2)	ラ salvare		ポ salvar				フ sauver
(3)	ラ dulcis		(dolce)				(douce) ポ doce
(4)	イ dolce						

(ラ＝ラテン語、ポ＝ポルトガル語、フ＝フランス語、イ＝イタリア語。それぞれの語の意味は、altus「高い」、salvare「救済する」、dulcis「甘い」)

上図は、以下のことを表している。

文字1はラテン語では [ɪ] と発音されていたが、時間の経過とともにポルトガル語では [u] に近い音あるいは [u] に変化していった。ポルトガル語ではまだ発音どおりの文字は使用せず、現代でも1を用いている ((1) alto, (2) salvar)。しかし、フランス語は、(1) (h)aut, (2) sauver のように完全に母音に変化し正書法でuになってしまった²⁸⁾。ただし現在では発音はauで [o] となっている。

しかし、(3) ラテン語 dulcis の場合は、ポルトガル語では doce になっているのであるが、dolce, douce という中間段階を経ていると想定できる。逆に言うと、この2つの形（音韻変化）を理論

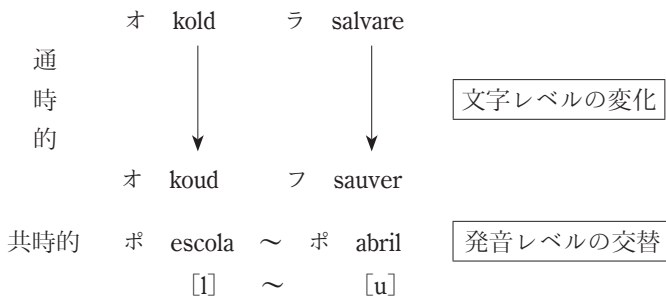
的に想定することによってのみ、ラテン語 *dulcis* とポルトガル語 *doce* の形態の関係(通時的変化)を説明することができる。すなわち、

ラ *dulcis* → ol [dolce] → 【1の母音化】 → ou [douce] → 【uの脱落】 → o [ポ doce]
 というプロセスを想定することができる。

なお、(4) イタリア語 *dolce* はラテン語の1をそのまま保持している。

さらに、大胆な予測をすると、ポルトガル語の *alto*, *salvar* は将来において、フランス語のようにその標準正書法が *auto*, *sauvar* と変化する可能性が考えられる。1 [u] を持つ *salvar* は動的な通時的変化の中の中間的段階の形式であると言える：*salvare* → *salvar* → *sauver* (→英 *save*)。フランス語は音声変化が一步先じそれが文字化した形式で、ポルトガル語も将来そうなることが十分想定できる。

ポルトガル語、オランダ語、ラテン語、フランス語の現象をもう一度共時・通時という概念を導入して図示すると以下のように問題点が整理できる：



この図からわかることは、音声学的に全く同一の現象が

1. 同一言語内で通時的に発生した (*kold* → *koud*)
2. 異なる言語間で通時的に発生した (*salvare* → *sauver*)
3. 同一言語内で現在共時的に発生している (*escola*～*abril*)

である。すなわち、時間、場所を超越して同一の言語現象が発生していることになる。ただ、共時的には発音レベルの交替であり、通時的には文字変化のレベルにまで及んだことには特に注意すべきである。

Abрил [u], little「リトゥ」などと同じ言語現象音声現象が Old Dutch (-1150) の時代に発生し、Middle Dutch (1150-1500) の時期にその結果が文字の上で明確に現われた。オランダ語は、1の音特徴ゆえに、たぶん何百年あるいはそれ以上の長い時間の流れの中で [u] に近い音に発音されるようになった。そして、その発音が文字に影響を与え、その結果通時的に *kold* → *koud* と正書法を変更するという大きな言語変化が生じたことになる。

VI 結語

世界に何千とある言語の中で、現在ポルトガル語で起こりつつある1 [l]~1 [t~u] は、単に共時的で一時的な、言語体系の中ではそれほど重要でない音声の交替現象、バリエーションにすぎないのかもしれないが、その現象が一つの言語の標準正書法を変えてしまう、さらに言えば、その言語の言語史に残る大規模な言語現象を起こさせてしまうのである(Vで述べたオランダ語、ラテン語、フランス語の例: kold → koud, salvare → sauver)。何百年、あるいはそれ以上の時間を必要とする通時の変化が日々われわれの目の前で発生していると言ってもいいのかもしれない。聴覚〔音声〕が視覚〔文字〕を変えたと言える²⁹⁾。

Iの初めて述べたように、英語 table, milk, Aprilなどはラ行音の「テーブル, ミルク, エイプリル」よりも母音を用いて「テイブゥ, ミック, エイプリゥ」と表記した方が、より英語母語話者の発音に近いと思われる。同様に英語の salt は「ソルト」とするよりも「ソット」とする方が原音に近いと言える。これは「現在」という共時で発生している現象である。

英語 salt はオランダ語では zout [zout] という。この形態は古い zolt から通時的に変化したものであり、日本語母語話者には聴覚的に salt が「ソット」に近くなる現象と同じであると言える。次のように図示すればわかりやすいであろう：

通時的 zolt → zout

共時的 salt → ソット

言語的血縁関係にあるヨーロッパ諸語に universitet, universidade, université, Universität, university などの語があるが、それぞれ何語であるかわからなくても意味は即座に理解できる。それだけ類似性の度合いが高いということである。このうちのどれか一つを母語としていれば、残りの4つは自動的に何の困難もなくその意味がわかってしまうので、これら5つの語は「同一である」と言っても差し支えないかもしれない。例えば最初の2語の語末は異なっているようであるが、よく見ると t と d の違いであって、これらは両方とも歯音 dental の破裂音で無声と有声だけで区別されている³⁰⁾。

先程挙げたオランダ語 zout [zout] と日本語「ソット」はどうだろうか。語頭の z と s は両者とも摩擦音で有声と無声の相違である。「大学」を意味する5つの語の類似性と比較すると、音連続の同一性から言ってもこちらの方が類似性の度合いが高いのではなかろうか。ただ、時間的に、空間的に全く関係のない所で、全く同じと言っていいほどの現象が発生しており、通時的現象と共時的現象が一致していることになる。

いままで1の持つ音声学的特徴のゆえに、共時的、通時的にどのような言語現象が印欧諸言語で発生する可能性があるかを観察してきた。そこで明確になったことは、共時と通時は決して分離独立しているのではなく、常に密接に結びついているということである。共時と通時で言語現象が相補分布を成しているわけではない。この結びつきは必然的なものであって切り離すことができず、同一音声現象が共時で発生しているか、通時で発生しているかの違いだけである。

長い時間的経過の中の言語現象である通時態をその一断面である共時態と峻別する必要があるのだが、いつも両者を同時に考慮しておく必要がある。共時は決して静的なものではなく、通時的な時間の流れの中で常に変化している動的なものと捉える必要がある。共時は、本質的に動的な通時の一断面を、無理やり切り取って静止画像にしたものにすぎない、すなわち共時も本質的には動的であると理解すべきである。共時現象の積み重ねが通時現象であって、われわれは通時的言語変化を現在実際に経験している³¹⁾。

【Denne artikel skal blive dediceret til Prof. Katsumasa Shimizu, som har haft stor indflydelse på min undersøgelse af de nordiske sprog (især islandsk) siden jeg studerede sprogvidenskab under Prof. Tatsuo Nishida og Prof. K. Shimizu underviste mig i fonetik ved Institut for Lingvistik på Kyoto Universitet.】

注

- 1) 他に、語末が-ollで終わるdroll, poll, toll, trollのような語も全て [ou] と二重母音化している。
- 2) 本稿では、主に南米ブラジルで話されているポルトガル語を扱う。
- 3) 母音間における無声音の有声化は日本語にも見られる：te「手」+kami「紙」→te-gami。英語は、Brazilのように発音をそのまま文字化している。
- 4) 最近、K. Árnasonはアイスランド語1の軟口蓋化について以下のように分析している (*The Phonology of Icelandic* p. 110) :
 ... this lateral may be velarized in forms like *belgdi* [pɛ̞ti] ‘inflated’ and *sigldi* [siti] ‘sailed.’
- 5) “Acoustic Cues...” p. 196.
- 6) この現象は種々の言語で観察される。例えば、J. O. Askedalはノルウェー語の例を示している (“Norwegian” p. 223) : handel [handɫ] 「商業」、våben [vo: pɫ] 「武器」。最後の2音 [-dɫ] [-pɫ] が第二音節を構成している。
- 7) *Phonetics*. p. 42.
- 8) H. Reetz & A. Jongman. *Phonetics*. p. 42:
 [velarization]... the alveolar lateral approximant /l/ has two allophones, light l and dark l. Light (or clear) l is produced with the tip of the tongue against the alveolar ridge and a relatively low tongue body. In general, /l/ is light when preceding a front vowel, as in *leaf* [lif]. For a dark l, the tongue tip rests near the lower incisors and the back of the tongue is raised towards the velum, which is why this allophone is also known as ‘velarized l.’ Generally, postvocalic /l/ is dark. The diacritic [~], placed in the middle of the symbol, indicates vealarization: [ɫ].
- 9) *An Introduction to Phonetics*... p. 65.
- 10) (2) [ɫ] の条件を「語末」と説明される場合もあるが、これは明らかに誤りである。
 E. S. Osborne et al. *Colloquial Portuguese*... p. 4.:
 l This is pronounced as in *look*: mala (suitcase). At the end of a word it sounds fainter, like *ow* in *cow*: natal (Christmas).
 ‘At the end of a word’ となっているが、bolsa, faculdade, polca, voltarの例を見れば、この記述が不適

当であることは明白である。「音節」という概念を導入すれば、言語学的に何の問題もなく説明できる。

- 11) cal-mo, Ro-nal-do と音節に分けることができる。Ronaldo (男子名) の語頭の r- は母音が後続する時 [x] という発音になる。
- 12) *Portuguese*. p. 163.
- 13) bald は「すぐに」の意味、ただし原義は “kühn” 「大胆な」。
- 14) デンマーク語, アイスランド語は別系統の語を使用: dristig, djarfur.
- 15) 英語は別系統の語を使用: proud.
- 16) デンマーク語は別系統の語を使用: skov.
- 17) “Old and Middle Continental...” p. 74.
- 18) “Generally, postvocalic /l/ is dark.” (H. Reetz & A. Jongman. *Phonetics*. p. 42) という音声学的な指摘がある。
- 19) W. Harbert は でオランダ語史の時代区分について以下のように説明している (*The Germanic Languages*. p. 17) :
- Chronologically, DU (= Dutch) is divided into Old DU (to 1150), of which only scant records exist, Middle DU, from 1150 to 1500, which is represented by a very substantial original literature, and Modern DU, since 1500.
- 20) 語頭は [k] と [ʃ] で対応。フランス語では母音 a の前で [k] → [ʃ] という通時的変化を起こした: cantare → chanter。この対応はフランス語特有で、他のイタリック語派の言語はラテン語の [k] をそのまま維持している: イタリア語 cantare, スペイン語 cantar, ポルトガル語 cantar。
- 21) sauve は sauf の女性形。
- 22) É. Bourciez. *Éléments de linguistique romane*. p. 308.
- Dans l + consonne, l s’est vocalisé en u et a formé diphtongue avec la voyelle précédente, ... (具体例としてラテン語 alba, フランス語 aube 「聖職者の白い長衣」の対応例を挙げている)
- 23) *Einführung*... p. 64.
- 24) 閉鎖音 Verschlusslaute はさらに以下のように分類できる: 唇音 Labiale, 歯音 Dentale, 硬口蓋音 Palatale, 軟口蓋音 Velare, 唇軟口蓋音 Labiovelare。
- 25) *Introduction*... p. 118. .
- 26) *Introduction*... p. 119. 1 のみについてその記述をここに掲げる:
- 印欧祖語 *l → サンスクリット ṛ, アヴェスタ語 arə, 古スラブ語 li/lü, リトアニア語 il/ul, アルメニア語 al, ギリシャ語 λα/αλ, ラテン語 ul, アイルランド語 li, ゴート語 ul の音韻対応表を示している。サンスクリット, アヴェスタ語の r はインド=イラン語派に特徴的なもので、この l~r の流音間の交替は言語的にはよく見られる: スペイン語 obligado, ポルトガル語 obrigado 「義務的な」。
- 27) フランス語 haut は本来の通時的変化では h は付かないのであるが (aut), ドイツ語の影響により h が付加された。J. Anglade は次のように説明している (*Grammaire élémentaire de l’ancien français*. p. 37) :
- ... ou influencés par des mots germaniques: *altum* > *aut* et, sous l’influence de l’allemand *hoch*, *haut*.
ちなみに、他のゲルマン語も全て h が語頭に來ている: デ語 hōj, ア語 hár, オ語 hoog, 英語 high。
- 28) É. Bourciez. *Éléments de linguistique romane*. p. 173.
- ... le portugais et le catalan ont en réalité un l vélaire. Ailleurs, il s’est définitivement vocalisé en u.
- 29) 英語は, th で有声音 (though) と無声音 (think) の両方を表し得るが, アイスランド語は英語の無声音 [θ] と有声音 [ð] を文字の上で区別している: þ と ð。しかし, 中世においては, 英語のように þ が [θ] と [ð] の両方の音を表していた (E. V. Gordon. *Introduction*. p. 268) :

21. *þ* in the oldest Icelandic manuscripts was used both for the voiceless sound of *th* in English *thin* and the voiced sound in *then*. About 1225 *ð* was introduced, and gradually *þ* came to be used only initially, and *ð* in other positions. *þ* then represented only the voiceless sound, while *ð*, except when following a voiceless consonant (rare, as *ð* then usually became *t*) was voiced, as in *faðir*, *við*.

また、英語、ポルトガル語などは一種類の文字1で2つの異音 allophone [t] [d] を表すが、ポーランド語は[t]と[d]の2つの音声に対して異なる2つの文字1とtを正書法としてアルファベットに使用している。音と文字が一対一対応になっている。

「聴覚が言語を変える、新しい語を作り出す」は日本語にもその例を見出すことができる：

(sewing) machine → ミシン

white shirts → ワイシャツ

Américan アメリケン → メリケン (粉)

San Francisco サンフランシスコ → シスコ [日本のみ]

これらは元の英語と発音、アクセントが全く異なる発音体系を持つ日本語の母語話者が、日本語発音規則の厳しい制約の中で最大限の努力をして元の音形式にできるだけ似せようとした結果である。

「パン」の元になったポルトガル語 *pão* をカタカナで正確にその音を写し取るのは不可能である。しかし、その外来語を受け入れるために言語間の激しい闘いを行い、日本語の語彙体系を変化させより豊かなものにしていった。

- 30) 印欧語という血縁関係にある諸言語の中では「歯音の破裂音で無声と有声だけで区別されている」で同一語彙であると言う確認が取れるが、「子音1と母音uは共時的、通時的に関連している」でも同様の確認を取ることが可能である。例えば、「空」を意味するフランス語 *ciel*、イタリア語の *cielo* に対して、ポルトガル語ではなぜ *céu* になっているのかが容易に理解できる。言い換えると、全く知らなくても、*ciel*、*cielo* から同じイタリアック語派ポルトガル語の *céu* を作り出すことができる。

言語学に「二重語(姉妹語)」*doublet* という用語がある。これは語源は同じであるのだが、入って来たルートによって語形が異なっている対を成す語を指す概念である。ラテン語 *collocare* 「並べて置く」から直接英語に入って来た語が *collocate* 「配置する」、ラテン語から変化をしたフランス語 *coucher* 「横たわる」を経由した形が *couch* 「長椅子」である。ここでもラテン語：フランス語 = 1 : u のルールを適用することによって何の困難もなく、いくつかの語彙の同一語源を確認することができる。

- 31) 生物学で言う「個体発生(共時)は系統発生(通時)を繰り返す」が言語にも当てはまる。

参考文献

- Anglade, Joseph. *Grammaire élémentaire de l'ancien français* (Paris: Librairie Armand Colin, 1965)
- Árnason, Kristján. *The Phonology of Icelandic and Faroese* (Oxford: Oxford University Press, 2011)
- Askedal, John Ole "Norwegian" in Ekkehard König & Johan van der Auwera (eds.). *The Germanic Languages* (London and New York: Routledge, 1994)
- Bermúdez-Otero, Ricardo "Diachronic phonology" in Paul de Lacy (ed.) *The Cambridge Handbook of Phonology* (Cambridge: Cambridge University Press, 2007)
- Bourciez, Édouard. *Éléments de linguistique romane* (Paris: Klincksieck, 1967)
- Clark, John & Colin Yallop. *An Introduction to Phonetics and Phonology* (Oxford & Cambridge: Blackwell, 1995)
- de Vries, Jan. *Nederlands Etymologisch Woordenboek* (Leiden: E. J. Brill, 1987)

- Gordon, E. V. *Introduction to Old Norse* (Oxford: Clarendon Press, 1971)
- Harbert, Wayne. *The Germanic Languages* (Cambridge: Cambridge University Press, 2007)
- Hutchinson, Amélia P. & Janet Lloyd. *Portuguese: An Essential Grammar* (London: Routledge, 1996)
- Meillet, Antoine. *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes* (Alabama: University of Alabama Press, 1964 [1937⁸])
- Osborne, Esmenia S., João Sampaio & Barbara McIntyre. *Colloquial Portuguese of Brazil* (London and New York: Routledge, 1997)
- Raphael, Lawrence J. "Acoustic Cues to the Perception of Segmental Phonemes" in David B. Pisoni & Robert E. Remez (eds.) *The Handbook of Speech Perception* (Oxford: Blackwell, 2005)
- Reetz, Henning & Allard Jongman. *Phonetics: Transcription, Production, Acoustics, and Perception* (Oxford: Wiley-Blackwell, 2009)
- Robert, Paul. *Le Nouveau Petit Robert* (Paris: Dictionnaires Le Robert, 1993)
- Szemerényi, Oswald J. L. *Einführung in die vergleichende Sprachwissenschaft* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1970)
- Wal, M. J. van der & Aad Quak "Old and Middle Continental West Germanic" in Ekkehard König & Johan van der Auwera (eds.). *The Germanic Languages* (London and New York: Routledge, 1994)